

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第15号

《研究ノート》

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和

南さつま市松木窟遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳

令和3年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2023. 3

『縄文の森から』第15号 目次

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広・・・・・・・・ 3

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和・・・・・・・・ 19

南さつま市松木菌遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏝について

川口 雅之・・・・・・・・ 29

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文・・・・・・・・ 33

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 43

令和3年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

Development of the Sakai River (Manose River tributary) watershed
from the Yayoi Period to the Early Modern Period
Yosifumi Kuramoto

要旨

中津野遺跡の発掘調査成果とこれまでの文献史学による研究成果から境川流域における主に水田開発について検討を行った。湿地帯を区画する道板から弥生時代前期中頃から水田開発が行われ、道跡や畦畔跡から古代末には新しい水田開発技術を取り入れた水田開発が行われていた。水田開発に伴い、尾下台地と中津野台地を繋ぐ主要な道は、時代により上流から下流へと移動していった。

キーワード 境川流域 水田開発 道跡 中津野遺跡

1 はじめに

2006（平成18）年に一般国道270号（宮崎バイパス）の改築工事を起因とする発掘調査が始まり、中断を経て平成29年度に終了した。2022（令和4）年には「中津野遺跡低地部・低湿地部編」が刊行された。この中津野遺跡の低地部・低湿地部が、境川流域にあたる。なお、便宜的に尾下集落の所在する台地を尾下台地、中津野集落の所在する台地を中津野台地と呼ぶこととする。

まずは、中津野遺跡の概要を述べる。中津野遺跡は、南さつま市金峰町中津野に所在し、台地上から台地の北側にある沖積地まで含む広い範囲をもつ遺跡である。遺跡が所在する中津野台地と北側の尾下台地の間には西流する境川（浦之名川）の氾濫による沖積地が形成されている。境川は尾下台地の北側から流れてくる堀川と高橋集落付近で合流し、まもなく万之瀬川に注ぐ。現在、堀川流域には広大な水田が広がる。尾下台地には「V」字形の大溝が松木藪式土器を伴って発見された松木藪遺跡がある。西側には吹上浜砂丘があり、この砂丘の東にある高橋貝塚が所在する高橋集落まで直線距離で約2 kmである。また、南約3.5 kmの万之瀬川右岸には持躰松遺跡や芝原遺跡等がある。

中津野遺跡は1950（昭和25）年に河口貞徳氏により発掘調査が行われ、中津野式土器の標式遺跡になっている。「中津野遺跡低地部・低湿地部編」で報告された調査箇所は中津野遺跡でも北端にあたり、中津野台地の縁辺から万之瀬川支流の境川までの範囲で発掘調査が行われた。中津野遺跡は境川の左岸に位置するが、右岸には中津野遺跡と同じ事業を起因として2006・2007（平成18・19）年に発掘調査を行った南下遺跡が所在し、2011（平成22）年に報告書が刊行されている。

中津野遺跡の低地部・低湿地部の発掘調査では縄文時代早期～晩期・弥生時代・古墳時代・古代・中近世の遺構・遺物が確認された。特に縄文時代後期では、集石・土坑・遺物集中等の遺構が検出されると共に指宿式土器や市来式土器が多量に出土した。また、弥生時代では豎

穴建物跡や土坑などが検出され、前期の刻目突帯文土器が多量に出土した。特に準構造船の一部である舷側板の出土は注目される。この舷側板を含む木製品等は、低湿地部において一定のまとまりをもって検出された。年代測定の結果、弥生時代前期から古代末までの年代を得た。さらに、中世を中心とする道跡や畦畔等の土木遺構が検出された。道跡を構成すると考えられる杭は年代測定を行った結果、古代末から近世までの数値を得た。

そこで、今回刊行された「中津野遺跡低地部・低湿地部編」（以下、報告書と記載する。）に報告された調査成果と尾下台地と中津野台地に挟まれた谷部を流れる境川流域の文献史学における研究成果とを併せて周辺の弥生時代から近世までの様相を検討することとした。具体的には、境川流域の水田開発と道について焦点化して述べてみたい。

2 中津野遺跡（低地部・低湿地部）の調査成果の概要

ここでは、調査成果の中でも境川流域の水田開発と道に関連するものに特化して報告書から引用する。今回報告書が刊行された中津野遺跡（低地部・低湿地部）の位置については第1図に示した。（以下、中津野遺跡とは低地部・低湿地部を指す。）また、中津野遺跡と境川の対岸にある南下遺跡の調査範囲については、第2図に示した。

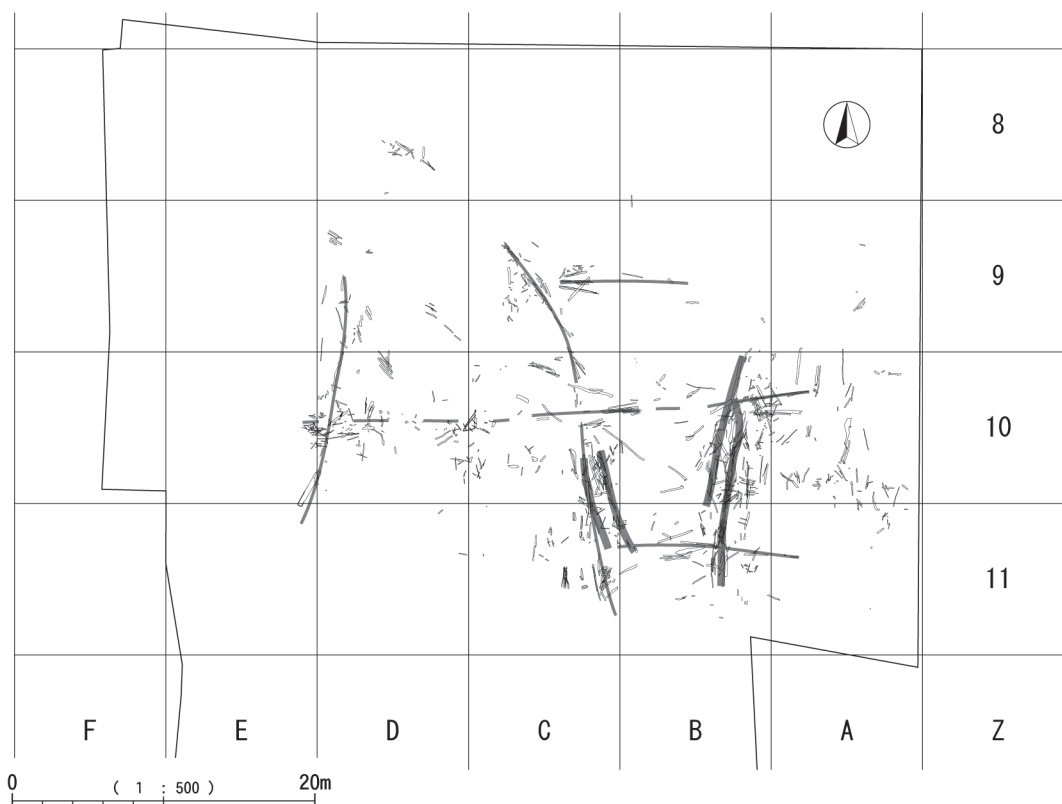
中津野遺跡の低湿地部から木製品の集中部が、Ⅱb層を中心に検出された。この集中部を形成する木製品の多くが、破損品であった。しかし、木製品は一定の方向性をもち、湿地帯を区画するように敷かれていた。第3図に出土状況とアミカケで木製品の敷かれていた方向性を示した。年代測定結果では弥生時代前期から古代の数値を得たが、なかでも弥生前期末から中期初頭の木製品が多くを占めた。また、木製品集中部周辺の土壌試料で自然科学分析を行っている。珪藻分析では、Ⅱ層の堆積時には周辺は池沼等の止水域であったことが想定されている。さらに、植物珪酸体分析によるとⅢ層の下位から上



第1図 中津野遺跡位置図



第2図 調査範囲と道跡



第3図 木製品集中部 中津野遺跡 低地・低湿地部編
第3-61図を一部改変

位にかけて連続して、特にⅡ層下位ではイネ属が産出されている。以上のことから、弥生時代前期には稲作が行われたことを想定している。

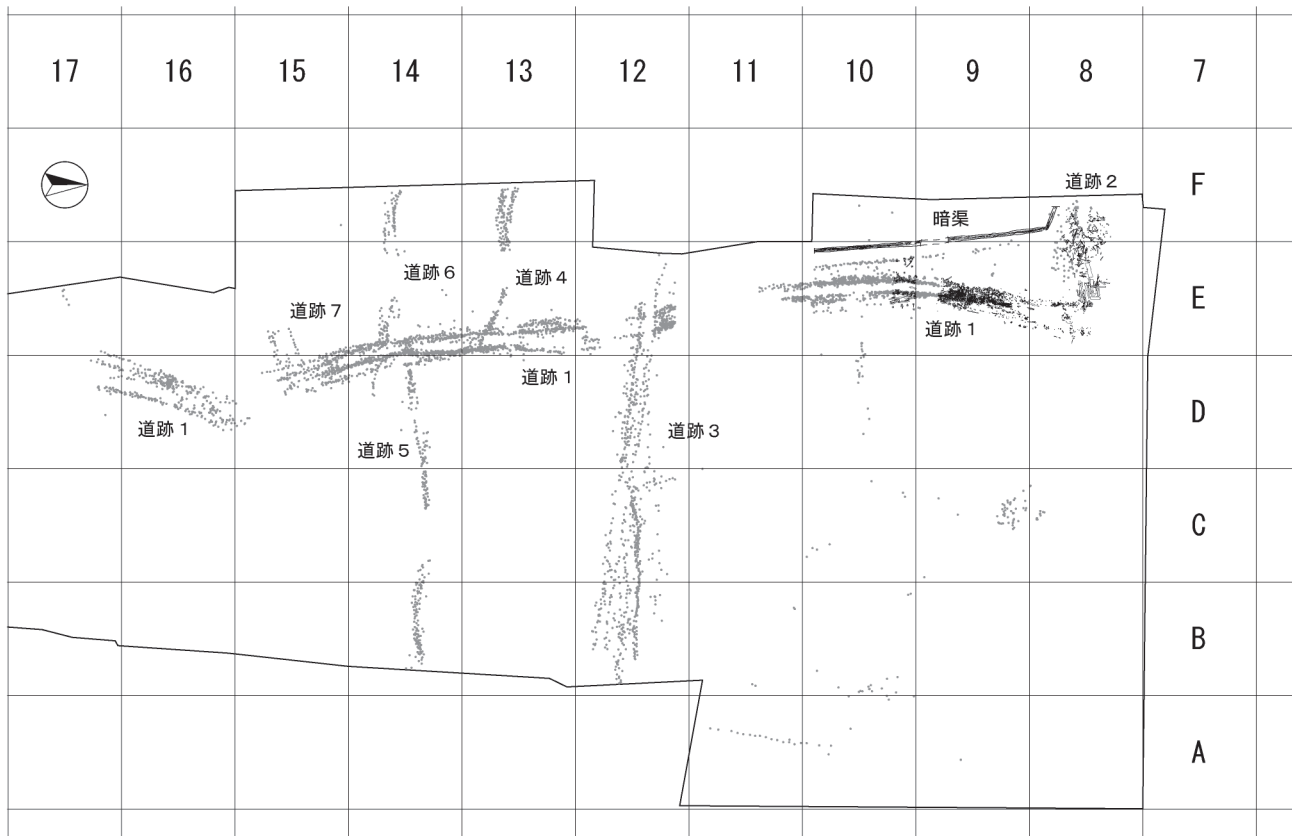
また、低地部から低湿地部にかけてのⅡ a層からは打設された状態の杭が、多量に出土した。杭は2列一組を単位として列状に確認され、杭列の間には盛り土や敷粗朶が確認されたことから、道跡としている(第4図)。報告書では想定される7条の道跡について説明を行っている。なかでも道跡1～3は道跡4～7と比べて道幅が広く、打設された杭の数も多い。特に道跡1は盛り土や敷粗朶が確認され、大規模な造成が行われていたと想定する。途中杭列の確認されなかった部分はあるものの長さ約90m、幅約2mでほぼ南北に延びる。道跡1は構成する杭の年代測定結果から、10・11世紀に造成が始まり、14・15世紀には大規模な補修・改修が行われたとする。道跡2は調査区の北端を東西に延び、西側は調査区境まで東側は道跡1と接する付近まで検出された。時期については道跡1と同じと推定している。道跡1と道跡2の接する付近の北側には戦前に構築されたと考えられる幅約7mのコンクリート製の井堰跡が確認され、ここに旧境川が流れていたとする(第5図)。道跡2は旧境川の堤防上に築かれた旧境川に沿った道跡とし、近くに検出された杭列から蛇行

した道を想定している(第5図)。また、尾下台地の南側に残る「馬渡(ウマワタリ)」、「川渡(カワワタシ)」や道跡が検出された西側の「上橋モテ」「下橋モテ」という小字から尾下台地と中津野台地を繋ぐ道があり、その一部が道跡1と想定している(第6図)。さらに、中津野遺跡の北側に隣接する南下遺跡で道跡が確認されていないことから、南下遺跡の調査区域を外れて道が続く可能性も述べている。また、道跡1から西もしくは東方向へ延びる杭列は道跡1よりも杭列の幅が狭く、水田を区画する畦畔としている。

3 これまでの境川流域に関する研究

ここでは「阿多郡司平忠景寄進状案 保延4年」、
「関東下知状案 貞永元年」、境川・堀川流域に関する研究について紹介する。これ以外の研究については、それぞれの項で触れることとする。

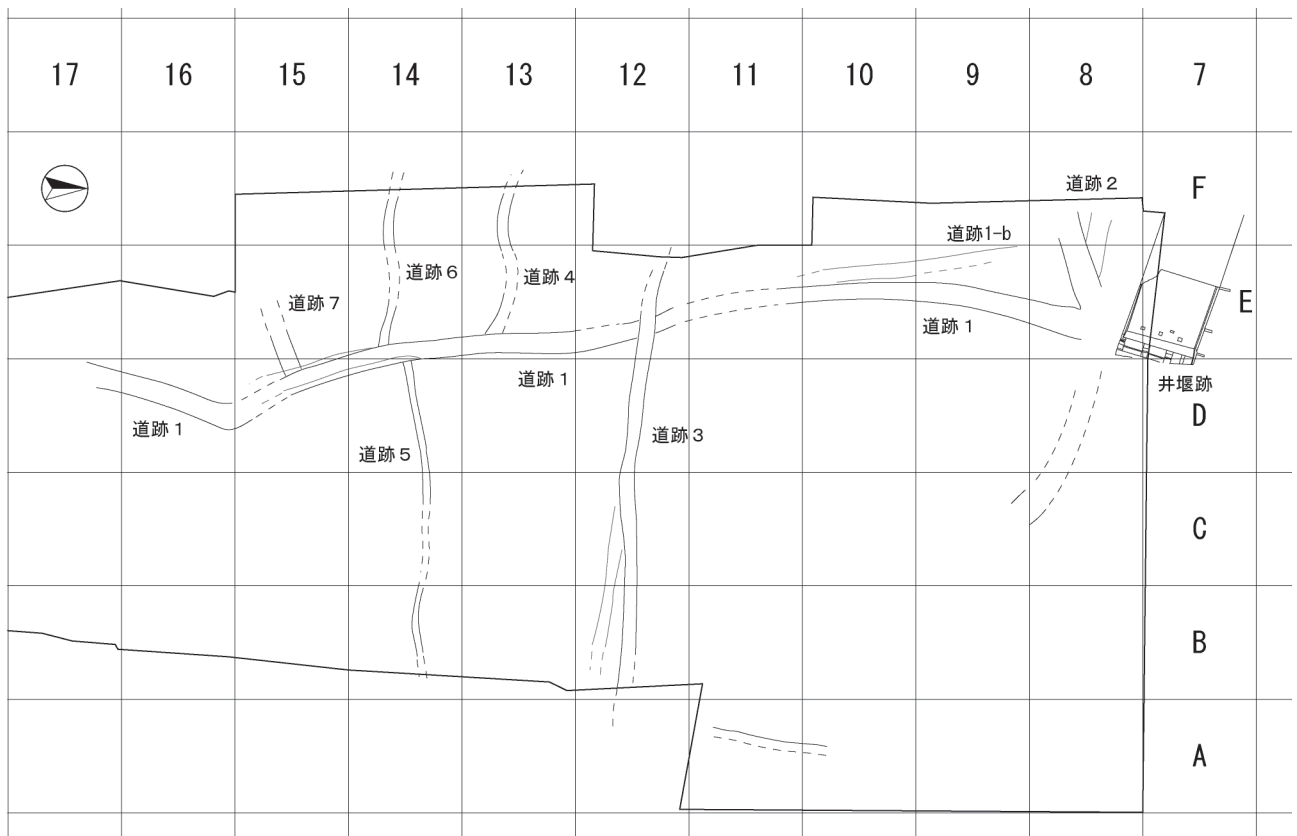
- (1) 「阿多郡司平忠景寄進状案 保延4(1138)年
「阿多郡司平忠景寄進状案」には祈祷料所として平忠景(阿多忠景)(注1)が「牟田上浦壺曲荒地」を観音寺へ寄進したとある。この中に寄進した土地の四至を
「限東御堂東小谷 限南神狩蔵峯并利山
限西船田頭野馬大路 限北不忘崎長崎」



1グリッド10m

第 4 図 道跡杭検出状況図

中津野遺跡 低地・低湿地部編
第 17 図を一部修正



1グリッド10m

第 5 図 道跡配置図

中津野遺跡 低地・低湿地部編
第 3-47 図を転載

と記してある。西の境は「船田頭野馬大路」で「船田」の字名は現在でも残っている。このことから五味克夫氏は「往事その付近を馬の往来する大路があったのであろう。」とする。柳原敏昭氏は近世の「薩州阿多郡田布施郷絵図」に描かれ、字「船田」付近を通る道を野馬大路と想定する。また、近世の道を前提にしたことを断りながらも「野馬」を南九州市川辺町の「野間」とし、野馬大路は野間に至る道とした。さらに、江平望氏は「牟田上浦」を近世の浦之名村にある門の名称から浦之名に比定している。

一方、観音寺へ寄進したのは「荒地」と記してある。「荒地」について12世紀の例を基に「所領寄進を正当化するために、そこが荒野となっていると称することはきわめて一般的な手段であった。」と黒田日出男氏は指摘している。この指摘を考慮すれば「阿多郡司平忠景寄進状案」保延4（1138）年の段階で少なくとも船田付近までは水田開発が進んでいたことになる。さらに柳原敏昭氏は「阿多忠景の段階で、船田より西側にも開発が及んだと考えられる。」と述べている。また、桑畑光博氏は、都城盆地を例として9世紀中頃から10世紀前半を古代の第一次開発ラッシュと位置づける。そして10世紀後半の気象悪化現象が一因となり、集落が衰退し、耕地が荒廃した可能性に言及している。

（2）「関東下知状案」 貞永元（1232）年

建久3（1192）年、阿多宣澄が保有していた阿多郡地頭職は没収となり、鮫島宗家（注2）が補任される。そして建保6（1218）年に南北に分割され、北方（田布施・高橋）を子の鮫島家高に、南方（阿多）を弟の鮫島宗景に譲った。その後、北方と南方による境界線の道をめぐむ争いがおこり、幕府による裁許を示すのが「関東下知状案」（貞永元年）である。これによると、当時、尾下台地の裾を通る北路と川沿いの南路があり、いずれも高橋に通じる道とある。北方は南路を、南方は北路を境界と主張したが、結局幕府は北方の主張する南路を境界と裁定した。

先の「阿多郡司平忠景寄進状案」にある野馬大路と「関東下知状案」にある南路との関係について五味克夫氏は野馬大路と南路は重なる可能性を指摘する。一方柳原敏昭氏は別の道であるとするが、野馬大路と南路が一部重なるか、交差する可能性は指摘している。さらに南路は「平安時代にさかのぼるものと考えてよからう。・・・自然堤防上の微高地を通過していたと推測される。」と述べている。

（3）境川・堀川流域の水田開発

中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地の水田開発について柳原敏昭氏は「三国名勝図絵」所収の「金峯山由来記」等の史料や阿多忠景と関係の深いとされる施設が検出された小菌遺跡が近くに所在することから「阿多郷絵図」に記された「古田」に着目し、水田開発が平安時

代後半期までさかのぼる可能性を指摘し、「谷部の開発は、郡司時代の阿多忠景によって行われた。」と結論づけた。

境川が高橋集落付近で合流する堀川流域の沖積地の水田開発については様々な指摘がある。市村高男氏は「持躰松遺跡が稼働していた11世紀後半～15世紀、万之瀬川下流域はこのラグーンを中心に荒涼たる湿地が広がる世界」と推定し、「12世紀半ば～後半の阿多忠景の開発は、こうしたラグーン縁辺部や湿地帯のそれであったと考えることができる。」と結論付けている。これに対して柳原敏昭氏は「沖積低地部にはラグーンの存在を想定しにくい。」とする。一方、江平望氏は「・・・高橋貝塚の遺跡が示すように、古くはこの近くまで海が湾入し、入り江に臨んだ港であったと思われる。すなわち中世までは阿多郡の唯一の開港場で、交通運輸上の一要地であった。」とし、先の貞永元（1232）年「関東下知状案」の内容から「これから察すると、高橋と浦之名との連絡は密接なものがあり、その間の開田もかなり進んでいたことが想像される。」と述べ、この地域の開発は阿多忠景によるものとする。また、柳原敏昭氏は「沖積低地部の開発は、忠景によって着手され、一定の成果をあげた後、鮫島氏・二階堂氏（ことに前者）によっても行われた可能性がある。」と指摘する。この地域のラグーンについて森脇広氏は持躰松遺跡の発掘調査報告書の中で周辺の遺跡の立地から縄文時代前期・弥生時代前期は「ラグーン的环境下にあった。」とする。

5 考察

前述のとおり、これまで文献資料をもとに様々な研究が行われてきた。ここでは、中津野遺跡の発掘調査結果もあわせて以下の事柄の検討を行う。

（1）境川流域における水田開発の変遷について

中津野遺跡では弥生時代前期から古代末までの道板（木製品集中部）と古代末から近世までの道跡及び畦畔跡が確認されたことから報告書では中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地に広がる水田を想定している。木製品集中部と道跡から出土した杭等の年代測定を行っているが、これをまとめたものが第1表である。（注3）2σ 暦年代範囲を大まかに「⇔」で、あわせて暦年較正用年代（yrBP）も示した。この表からは、境川流域における水田開発の特徴が見て取れる。一つ目は、湿地帯に道板を敷き区画を設けての稲作が弥生時代前期中頃に始まったことである。二つ目は、湿地帯を区画する道板が少なくなる期間が長い間続くことである。三つ目はその後、水田を区画するために杭等で道や畦畔を古代末に造り始めたことである。

道板の年代測定は暦年較正用年代（yrBP）で2,400年代より古くなるものはなく、最も新しいものが900年代である。年代測定結果にばらつきのあった舷側板を除いた試料26点のなか、19点が2,400～2,100年代の範囲

出土 区域	試料 番号	掲載 番号	2σ 暦年代範囲 calBC								2σ 暦年代範囲 calAD								暦年校正用 (yrBP)	備 考											
			8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8			9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	35	879																												1882 ± 27	
	39	882																												2211 ± 23	
	40	869																												2341 ± 24	
	41	874																												2228 ± 23	
	42	877																												2160 ± 22	
	43	528																												1530 ± 22	
	45	878																												2233 ± 24	
	48	883																												2232 ± 26	
	49	385																												1023 ± 25	
	51	870																												1858 ± 26	
	52	876																												2209 ± 19	
	54	885																												2473 ± 21	絨刺版
	55	885																												2401 ± 22	同一試料2回測定
	56	885																												2462 ± 22	絨刺版
	57	-																												2320 ± 22	同一試料2回測定
	67	887																												2491 ± 21	絨刺版
	70	384																												2389 ± 22	同一試料2回測定
	71	894																												2207 ± 21	
	76	-																												2425 ± 22	
	79	893																												933 ± 21	
	80	891																												2195 ± 21	
	82	881																												2362 ± 21	
	84	884																												2166 ± 22	
	85	889																												2176 ± 22	
	89	873																												2165 ± 20	
	91	879																												2481 ± 20	
	92	-																												2216 ± 22	
	93	-																												2370 ± 20	
	96	880																												1815 ± 21	
	58	-																												2478 ± 20	
	59	-																												2211 ± 22	
	60	-																												2065 ± 21	
	61	-																												2446 ± 21	遺跡1下 III層出土
	62	-																												1005 ± 22	遺跡1 杭
	63	-																												645 ± 20	遺跡1 杭
	64	-																												620 ± 20	遺跡1 杭
	65	-																												137 ± 20	遺跡1 杭
	66	-																												358 ± 19	遺跡1 杭
	69	208																												618 ± 19	遺跡1 杭
																														936 ± 19	遺跡3 板材
																														588 ± 19	遺跡1 杭
																														427 ± 22	遺跡1 縄

第1表 木製品等年代測定結果 中津野遺跡 低地部・低湿地部編 第8章のデータを基に作成

に含まれる。また、2,000年代以降のものは7点であった。なお、舷側板は同一試料で2回測定を行い、大まかには暦年較正用年代 (yrBP) 2,300年代と2,400年代とばらつきがある結果であった。舷側板以外に最も古い数値が2,400年代であるが、道板 (木製品集中部) 近辺から土器等の出土がなく、舷側板の年代測定結果にばらつきがあることから時期の明確な特定は難しい状況である。そこで暦年較正用年代 (yrBP) が2,400年代という数値を基に北部九州における弥生式土器型式に当てはめると前期中頃に相当する。舷側板の2,300年代という新しい数値まで含めても前期中頃から中期初頭の板付Ⅱ式〜城ノ越式に相当する。なお、遺跡全体では石包丁や弥生時代前期中頃から後半の土器が多量に出土している結果と齟齬はないと考える。以上のことから、中津野遺跡周辺では道板を湿地帯に敷いて区画を設けて行う稲作は弥生時代前期中頃から始まり、古代末で終わる。しかも、この方法が盛んに行われるのは暦年較正用年代 (yrBP) が2,100年代 (BC 3世紀) までで、その後は極めて少なくなる。この理由として想定できることが二つある。一つは稲作が何らかの理由で衰退すること、もう一つは紀元前3世紀以降、周辺の陸地化が進み道板を敷く必要がなくなったことが考えられる。

中津野遺跡で確認された道板で区画する面積は70〜80㎡と報告されている。これは、当時の水田1枚の面積とするには広すぎる印象がある。弥生時代の後期ではあるが、薩摩川内市の京田遺跡でも水田跡が検出されている。ここでの1区画の面積は広いもので約20㎡で、他は10㎡に満たない。この調査結果からすると、中津野遺跡の木製品を敷いて区画した範囲は大区画で、実際の稲作は大区画を分割した小区画で行っていた可能性がある。

道板で区画する方法が始まる弥生時代前期中頃以前の稲作については言及できるだけの調査結果は少ない。しかし、中津野遺跡の縄文時代早期〜後期の包含層であるⅢ層からもイネ属の珪酸体が産出されていることから稲作が弥生時代前期中頃を遡る可能性も残る。さらに、上流から下流に向かって止水域や陸地化が進むことを考えると中津野遺跡より上流側や境川の支流が浸食した谷部で弥生時代中期以前に稲作が行われ、その時期の水田跡が残っている可能性もある。

前述のとおり道板を使って水田を区画する方法は、古代末に終わる。そして同じ頃に2列1組の杭を打設して道や畦畔を造成し、水田を区画する方法が始まる。中津野遺跡では南北に幅2mの核となる道の大規模に、これから東西に延びる畦畔を造成する土木工事を行っている。畦畔に使われた杭の年代測定は行っていないが、畦畔は道跡に伴うものと考えれば道跡を構成する杭の年代測定結果で類推できる。杭をもって水田を区画する方法は、道板のそれよりも強固な畦畔で水を管理しやすいものであったはずである。それまでの稲作と比べ大規模な水田開発が可能で生産性も上がったと考えられ、まさしく時代の転換期であったであろう。

この水田開発が始まった古代末は律令制度の崩壊と荘園化が進む時代であり、この社会的背景と深い関わりのあると考えられる。このことについて日隈正守氏は「薩摩国における11世紀の時期は郡郷制改編の開始とともに荘園公領制形成の端緒が見え始めた時期であると総括できる。」と指摘する。また、新田八幡宮が鮫島家高との争いで提出された「康和立券紛失状」をもとに阿多郡内に荘園が設定された時期については「康和年間 (注4) より幾らか以前の時期、恐らく11世紀後期であると考えられる。」と述べる。

中津野遺跡で確認された杭を打設するという新しい工法による水田開発は、杭の年代測定の結果によると10世紀まで遡る。阿多郡内における荘園の設定の時期については言及できるだけの発掘調査成果はないが、新しい工法による水田開発と荘園の設定には何らかの関連性があると考えられる。さらに、多くの研究者が指摘しているように大陸との交易で重要な役割をもった持躰松遺跡との関連も考えられる。ここからは貿易陶磁器が多量に出土し、そのピークは12・13世紀とするが、11世紀のものも確認されている。境川流域の水田開発も含め、万之瀬川流域においては11世紀が時代の転換点となったことが注目される。

(2) 阿多忠景が寄進した荒地について

古代末には中津野遺跡の上流側で水田開発が行われていたことがわかる史料が、保延4 (1138) 年の「阿多郡司平忠景寄進状案」である。前述のとおり、阿多忠景が祈祷料所として「牟田上浦壺曲荒地」を観音寺に寄進したとある。ここは中津野遺跡から800mほど上流にある浦之名の一部に比定されている。これまでの研究でも「荒地」ではなく、開発された水田であったという見解が示されている。「牟田上浦」の比定箇所についての発掘調査は行われていないが、中津野遺跡の発掘調査結果から当時の状況が類推できる。阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」より下流に位置する中津野遺跡では古代末には杭を打設して道や畦畔を造る新しい方法で水田開発が行われていた。さらに南北に延びる道跡1から西側 (境川下流側) に延びる畦畔 (道跡4・6等) もあることから中津野遺跡の西側へも早い段階で開発が及んでいたことも想定される。つまり、阿多忠景の時代には「牟田上浦壺曲」はもとより中津野遺跡で検出した道跡等よりさらに西側まで開発が及んでいた可能性もある。水田開発は水等の管理がしやすい河川の上流部からと開始されたと考えられる。このことから阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」は「荒地」ではなく、既に開発された土地と見ることが妥当であろう。ただ、桑畑光博氏が言及するように荒廃した耕地を再開発した可能性はある。

さらに、中津野遺跡で確認された杭を打設して区画するという水田開発方法の開始は、年代測定結果から阿多忠景が「牟田上浦壺曲荒地」を観音寺に寄進した時よりも100年以上ほど遡ることがわかった。阿多忠景よりか

なり早い時期に新しい方法による水田開発が始まり、ある程度開発が進んだ段階で阿多忠景が引き継いだと考える。さらに14世紀を中心に道跡1は大規模な補修・改修が行われたことから、阿多忠景のあと婿の宣澄、そして鮫島（阿多南方地頭）・二階堂（阿多北方地頭）へと水田開発が引き継がれたと考える。

(3) 境川流域に延びる道について

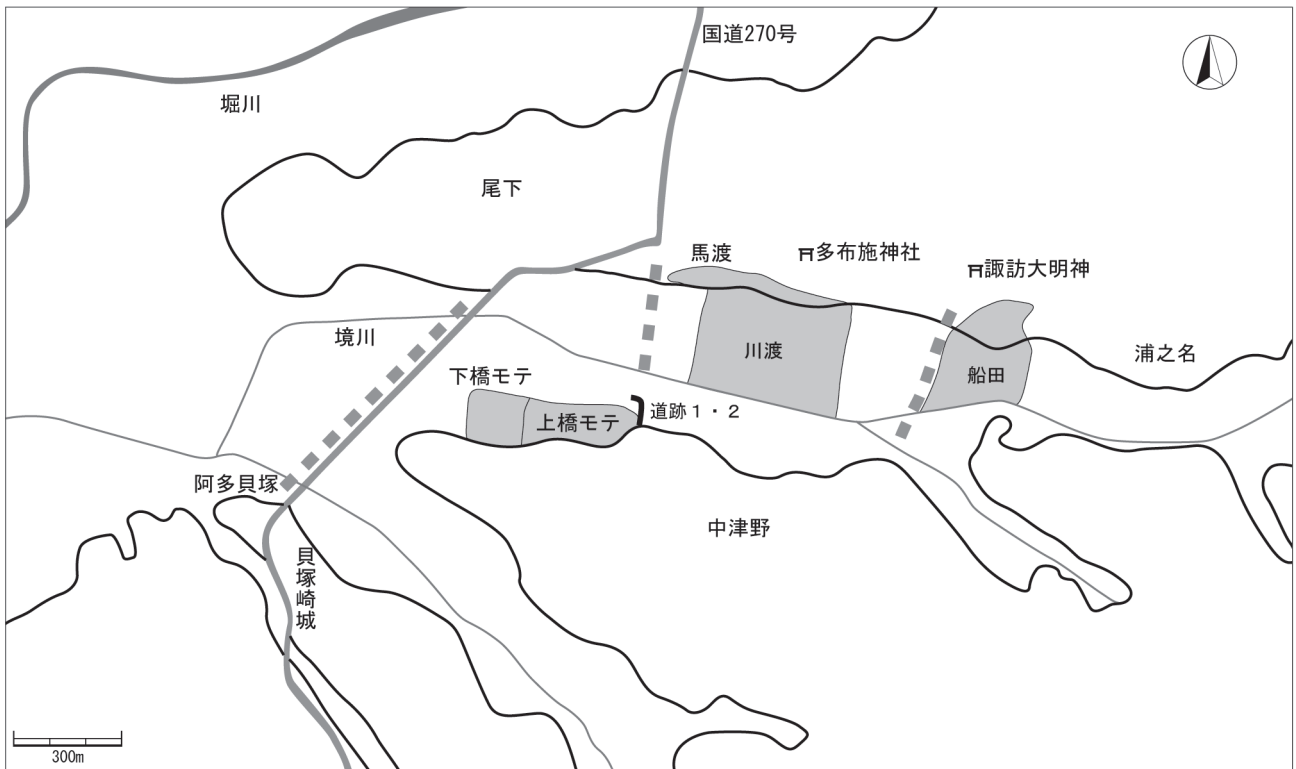
中津野遺跡の発掘調査成果とこれまでの調査研究成果を検討した時に中津野台地と尾下台地を繋ぐ主要な道が時代と共に境川の上流から下流に向かって移動したことが想定される。これらの道については第6図に「■■■■」で、併せて関連する字の位置についても示した。

中津野遺跡では前述の道跡1が検出された。これを構成する杭や敷粗朶に関連すると考えられる縄の年代測定結果から11世紀から19世紀に亘って補修を繰り返しながら継続的に道が使われ、特に14世紀には大規模な造成が行われている。湿地帯に杭を打設して造る道を核とした新たな水田開発は11世紀から始まり、14世紀には中津野台地と尾下台地に挟まれた水田地帯を南北に延びる強固な道になったと考えられる。しかし、中津野遺跡の北側に隣接する南下遺跡からは道跡1に関連する遺構が検出されていないが、報告書では中津野遺跡周辺には「上橋モテ」、「下橋モテ」「川渡」、「馬渡」の字が残ることから尾下台地と中津野台地の間を繋ぐ道があったと想定している。このことから中津野台地から旧境川まで延びた道は、いずれかの場所で境川を渡って尾下台地と繋

がっていたと考えられる。つまり、14世紀には、この道跡1が中津野台地と尾下台地を繋ぐ主要な道として利用されていたと考える。

この道跡1の北端付近では枝別れる2列一組の杭列が検出されている（第5図道跡1-b）。この杭列を構成する杭の1点が、19世紀の年代測定結果をもつ。道跡1と比べると杭の数も少なく道幅も狭くなり、これに沿うように足跡も検出されていることから畦畔と考えられる。反対に、道跡1の杭に19世紀の年代測定結果をもつものはない。つまり、19世紀には道跡1に沿うように畦畔程度の道が造られることから道跡1が主要な道としての役割を失ったことが発掘調査結果から考えられる。さらに、寛政4（1792）年に描かれた「薩州阿多郡田布施郷絵図」には道跡1に関連するような道は描かれていないことから18世紀後半にはすでに主要な道としての役割を失っているといえる。

中津野遺跡から東（境川上流）約800mに「野馬大路」が延びていたとされる字「船田」がある。「野馬大路」は、阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」の西の境である。「大路」であるからには、それなりに主要な道であったはずである。字「船田」付近の発掘調査は行われてはいないが、阿多忠景の時代である12世紀には中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地に「野馬大路」があった。この「野馬大路」が、中津野台地と尾下台地を繋ぐ道であったか否かについては定かではない。しかし、中津野遺跡の調査成果から道の造成と水田開発は一体に進められていることから字「船田」付近の開発も同



第6図 境川流域の道

中津野遺跡 低地・低湿地部編
第3-49図を一部改変

様であったと考えられる。つまり、中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地である字「船田」付近にほぼ南北に通した道を中心に水田開発を行ったと考えられることから「野馬大路」は中津野台地と尾下台地を繋ぐ道と想定する。

中津野遺跡からさらに西側（境川下流）約600mには国道270号が、中津野台地の南西側に位置する宮崎台地と尾下台地を繋ぐように延びる。この国道は、前述した「薩州阿多郡田布施郷絵図」に描かれている尾下台地から宮崎台地先端にある貝殻崎城跡へ続く道とほぼ重なる。柳原敏昭氏は「・・・阿多郡一加世田別府間の中世の道は、基本的に国道270号線と同じ道筋であったとしてよいのではなからうか。」と述べている。つまり、18世紀後半には現在の国道270号とほぼ同じ道筋に主要な道が延びていたことと考えられる。ただ、宮崎台地と尾下台地を繋ぐように延びる国道270号に隣接する沖積地の発掘調査は、これまで実施されていない。

以上のことから、尾下台地と中津野台地に挟まれた湿地帯には平安時代末から近世の間に主要な道が3条造られていたと考える。つまり、境川流域の主要な道は阿多忠景の時代は境川上流の字「船田」付近を通る「野馬大路」、14世紀には中津野遺跡で検出された道跡1、近世には現在の国道270号とほぼ同じ道筋と時代毎に移動していったと考えられる。道の造成は当然水田開発に伴うものであり、主要な道が西に移動することは水田開発が西に進んでいったことを物語る。

さらに、「関東下知状案」貞永元（1232）年にある「南路」について述べる。この「関東下知状案」に南路は川に沿った往古からの路であったという。発掘調査で検出された道跡2が南路にあたる可能性について考えてみたい。報告書では道跡1の北端に確認された幅約7mのコンクリート製の井堰跡を根拠に旧境川があったとする。ここで問題となるのが、井堰跡を流れていたのが旧境川だったかという点である。中世の地理的要素を色濃く反映すると考えられる近世に作成された「薩州阿多郡田布施郷絵図」では旧境川は蛇行しながら西流し、この旧境川と中津野台地の間には旧境川に流れ込む小河川が短く描かれている。しかし、この小河川は、今回発掘調査を行った中津野遺跡付近までは到達していないように見える。また、現在の境川は改修され直線的な流路となっているが、それ以前の流路とは異なると考えられる。境川の北側に隣接する南下遺跡の発掘調査では狭小な自然流路跡以外は確認されていないことから、旧境川は現在の境川より南側（中津野遺跡内）を流れていたと想定できる。さらに、場所によって異なるが、現在の境川の低水路幅が10m弱であり、井堰跡の幅とほぼ同じである。以上のことから井堰跡を流れていたのは旧境川と推測できる。この旧境川の堤防に築かれたのが道跡2である。道跡2を構成する杭等の年代測定は行っていないが、道跡1と一連の道であると報告されていることから道跡2も11世紀には造成されていた可能性は高い。以上

のことから先の「関東下知状案」にある「南路」は、道跡2の可能性も選択肢の一つとして考えられる。

（4）堀川流域の自然環境について

境川は国道270号を越えてさらに西側に流れ、尾下台地の北側を流れる堀川と高橋集落付近で合流する。この堀川流域に広がる沖積地の水田開発について今回の調査では直接的に関連する成果はなかった。前述のとおり、これまで議論の経過も踏まえ、自然環境について若干の考察を行う。中津野遺跡周辺は縄文時代後期の包含層であるⅢ層の堆積時には止水域であったことが自然科学分析結果から想定されている。中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地はかなり早い段階から陸地化が始まり、時代とともに境川の下流方向へ広がっていったものと考えられる。また、年代測定で弥生時代前期の数値を得た水田を区画する道板はⅡ層出土であるが、そのⅡ層下位からは植物珪酸体分析ではイネ属が検出されている。この時期には周辺は水田として開発されていたと考えられる。さらに道板の中に準構造船の舷側板が確認され、最大長約272cm、最大幅約30cm、最大厚約5cmを測る。年代測定では弥生時代前期の数値を得ている。この3m近い船の部材を人力で遠い場所から運ぶことは考えにくく、近くに手に入れやすい環境があったと考えられる。つまり、さほど遠くないところまでラグーンが広がっており、近くに廃船の部材を活用できる環境か、もしくは船で部材を運ぶことができる環境にあったと推定する。これらのことから、弥生時代前期には中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地では稲作が行われ、台地間の沖積地を抜けたあたりにはラグーンが広がっていたと考えられる。ただし、いつの時代までラグーンが存在していたか、その範囲等を推定するほどの調査成果はなかった。

6 おわりに

最後に、これまでの内容を以下のようにまとめる。

- （1） 中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地を流れる境川流域において弥生時代前期中頃には道板を敷いて湿地帯を区画した水田で稲作を行っていた。この方法による稲作は古代末まで続くが、紀元前2世紀以降は道板が少なくなる。そして古代末には多数の杭を打設して道や畦畔を造成し、水田開発を行うようになる。
- （2） 自然科学分析結果から、この流域での水田開発は弥生時代前期中頃には始まる。稲作についてはこれを遡る可能性もある。
- （3） 新しい工法による水田開発や近隣の遺跡の発掘調査成果から万之瀬川流域における時代の転換点は、11世紀にある。
- （4） 阿多忠景が寄進した「牟田上浦壺曲」は、既に開発された水田と見ることが妥当である。
- （5） 中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地を流れる境川流域において杭を打設して水田を区画する方法は阿多忠景の時代より約100年以上前に始め

られ、その後、阿多忠景に受け継がれ、さらには
鯨島・二階堂の時代の開発へと続く。

- (6) 中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地を南北に繋ぐ主要な道は3条あり、時代毎に異なる。12世紀は「野間大路」、14世紀は中津野遺跡検出の道跡1、19世紀は現在の国道270号と重複する「薩州阿多郡田布施郷絵図」に描かれた道筋が主要な道であった。
- (7) 「関東下知状案」貞永元(1232)年にある「南路」は、中津野遺跡検出の道跡2の可能性がある。
- (8) 弥生時代前期には中津野台地と尾下台地に挟まれた沖積地では稲作が行われ、台地間の沖積地を抜けたあたりにはラグーンが広がっていたと考えられる。

「中津野遺跡低地部・低湿地部編」の整理作業に多少なりとも携わり、2022年の8月によりやく刊行に漕ぎ着けた。しかし、報告書作成作業においては個人的な技量や時間的な制約の中で調査成果の検討や評価が不十分であったことは反省点である。そこで、報告書作成の作業中に浮かび上がった課題のいくつかについて今回検討を行った。境川流域でも一部分の発掘調査成果で全てを解明できる訳でもなく、単なる想定に終わった部分や不十分な検討に終始した部分も多々あった。今後、境川や堀川などの支流も含めた万之瀬川流域の研究が進む事を期待したい。

- (注1) 阿多忠景 平安末期、薩摩平氏の棟梁的存在で、薩摩国を惣領し、その勢力は大隅にも及んだ領主である。その後、追討軍が派遣され、逐電することとなる。
- (注2) 阿多忠景の逐電後、婿阿多宣澄が跡を継ぐ。阿多宣澄も1192年鎌倉幕府により追放され、阿多郡は鯨島宗家に与えられた。
- (注3) 第1表に示してある資料番号58は道跡1の下位から出土したが、出土層が異なることから道跡1には伴わないと報告されている。また、資料番号69の「縄」は道跡1内の砂質土から確認されたシュロ製のものである。
- (注4) 康和年間 1099~1104年

一引用・参考文献一

- 市村高男 2003 「11~15世紀の万之瀬川河口の性格と持躰 松遺跡-津湊泊・海運の視点を中心とした考察」『古代文化』VOL.55
- 江平望 1972 「古代末期の薩南平氏-とくに平権守忠景と阿多四郎宣澄について-」『知覧文化第9号』
- 江平望 1991 「中世加世田別府史」『笠沙町郷土史上巻』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 「京田遺跡」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(81)

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 「南下遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022 「中津野遺跡低地部・低湿地部編」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(217)
- 金峰町 1987 「金峰町郷土史」金峰町教育委員会
- 1998 「持躰松遺跡 第1次調査」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 黒田日出男 1981 「中世の開発と自然」『一揆 4』東京大学出版会
- 柴畑光博 2017 「考古学から見る島津荘の成立」『上野原縄文の森考古学講座(第3回)資料』
- 五味克夫 1996 「中世前期の南薩の道-阿多郡を中心に-」
- 「歴史の道調査報告書第四集 南薩地域の道筋」鹿児島県教育委員会
- 原口泉他 1999 「鹿児島県の歴史」
- 日隈正守 2001 「新田八幡宮の阿多郡支配に関する一考察」鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 52」
- 日隈正守 2002 「薩摩国における荘園公領制の形成過程」鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 53」
- 日隈正守 2010 「中世前期薩摩国阿多郡の歴史的位置について-国衙関係寺社を中心に-」鹿児島大学稲森アカデミー研究紀要 2」
- 藤尾慎一郎 2009 「弥生時代の実年代」『新弥生時代の始まり4』雄山閣
- 柳原敏昭 1999 「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』
- 柳原敏昭 2005 「中世万之瀬川下流域の様相について-近世絵図をてがかりとして-」『中世の地域と宗教』
- 柳原敏昭 2011 「中世日本の周縁と東アジア」

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第15号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
